

夫の家事労働に対する異質的な影響 —無条件分位点回帰による検討—

鈴木健一郎（名古屋大学大学院）

1 問題の所在

夫の家事労働が少なく、妻側に家事分担が偏っていることは、先進各国に共通する課題である。夫の家事労働を説明する基本的な仮説としては、夫婦内の社会的資源の偏りに着目した相対資源仮説、夫・妻の労働時間から説明を試みる時間制約仮説、性別役割分業意識といった意識を取り上げたイデオロギー仮説の3つが挙げられる(Shelton and John 1996)。先行研究では、これらの基本的な仮説を検証する形で実証が積み重ねられてきたが、そのほとんどがOLSをベースとした分析手法を用いており、平均的な効果に着目するにとどまっている。

ただし、遅滞適応モデル(lagged adaptation model)(Gershuny et al. 2005)を参照すると、家事をよくやる層のほうはやらない層よりも家事をやるためのコストが低くなると考えられる。よって、基本的な仮説が着目する諸要因から受ける影響は異質的なものである可能性がある。以上より、本報告の目的は、家事労働について無条件分位点回帰を適用し、基本的な仮説について分布全体にわたって検討することで、家事をよくやる層とやらない層の間で受ける影響にどのような差異があるのかを記述することである。

2 データと方法

2008年から2018年までに行われたJGSSを合併させたものをデータとして用いる。目的変数は、夫の1か月あたりの家事頻度であり、注目する説明変数は、夫の収入割合、夫・妻の労働時間、夫の性別役割分業意識である。分析には無条件分位点回帰(Firpo et al. 2009)を用いた。

3 結果と議論

夫収入割合や夫・妻労働時間、性別役割分業意識の係数の絶対値は、家事をやらない層にくらべて、よくやる層のあいだで、大きくなる。この結果は、夫の収入割合が小さい場合、あるいは、夫の労働時間が短い場合、妻の労働時間が長い場合、性別役割分業意識が弱い場合に、家事をやらない層に比べて、よくやる層のほうで、家事労働を行う傾向が強くなると解釈できる。これは、家事をよくやる層のほうで、こうした要因に敏感に反応し、左右される度合いが大きいことを意味する。以上の結果からは、基本的な仮説は家事をよくやる層の間で比較的有效性が高いものである一方で、家事をやらない層についてはこれまで着目してきた要因とはほとんど無関係に、単に家事をやっていないだけである可能性が示唆される。

付記 二次分析に当たり、JGSS データダウンロードシステムで個票データの提供を受けた。

文献

Firpo, Sergio, Nicole M. Fortin, and Thomas Lemieux, 2009, “Unconditional Quantile Regressions,” *Econometrica* 77(3):953–73.

Gershuny, Jonathan, Michael Bittman, and John Brice, 2005, “Exit, Voice, and Suffering: Do Couples Adapt to Changing Employment Patterns?” *Journal of Marriage and Family* 67(3):656–65.

Shelton, Beth Anne, and Daphne John, 1996, “The Division of Household Labor,” *Annual Review of Sociology* 22:299–322.

キーワード：家事労働、無条件分位点回帰、遅滞適応モデル